ライフスタイル移民としての日本人女性
――インドネシア・バリ島の事例から――

東北大学大学院文学研究科人間科学専攻
ニ・ヌンガー・スアルティニ

本志向論文は、グローバル化時代における個人のオルタナティブな生き方として、自分に合う暮らし方を海外に求めるライフスタイル移民に注目し、その生活実態を明らかにしたものである。具体的には、インドネシア・バリ島で暮らす日本人女性たちへの聞き取り調査を通して、スローライフをする自身の価値観を国際移動の動機とする女性たちを対象に、自立的・主体的な女性移民として記述し、分析することを目的とした。

以下では、各章のまとめを行い、最後に研究の成果とその意義を提示する。

第1章では、日本人女性の国際移動の変化を明らかにするために、日本人の海外渡航の歴史を把握したうえで、日本人女性の海外旅行の変遷について検討した。日本人の海外渡航の歴史をみると、明治時代から昭和時代の初期にかけての海外渡航は、政府の派遣および国策によるものが多かった。いずれも経済・社会的上昇を求めるものであった。そして、彼らは渡航する際には、すでに移住の動機をもっていたということである。

戦後、日本の経済復興とともに国際化も進み、1964 年に海外渡航が自由化された。これが、新たな海外渡航が誕生するきかっけとなった。それは、経済・社会的上昇を求める海外渡航から、観光という娯楽を求める渡航への変化でもあった。その後、ボーイング機の就航等もあり、海外旅行は大衆化していった。そして、男女平等の普及、女性の学歴上昇や社会進出を背景に日本人女性も海外旅行へ出かけるようになった。さらに、バブル景気や円高により、海外旅行の経験者が増加したことで、旅行の形態が変わり、パッケージツアーから自由旅行に変化した。自由旅行では、旅行者は自由に時間を楽しむことができ、現地の人々と交流することも可能となった。

自由旅行が普及した 1990 年代には、日本でアジアブームが起こり、自由旅行でアジア諸国を訪れる女性も多くなった。なかでも人気の旅行先となったのがバリ島である。彼女たちが感じるアジアの魅力は、ノスタルジーや癒しである。これらはまさに、後述

するライフスタイル移民が移住先に求めるものである。

第 2 章では、日本人女性がなぜバリ島を目指すのかを明らかにするために、バリ島の観光を中心にバリ観光の特徴について検討した。バリ島はオランダ植民地時代から欧米で観光地として知られており、バリ島を訪れた欧米人が写真集や旅行記を出版し、バリ島を宣伝した。この時期、すでにバリ島は「楽園」のイメージが形成された。「楽園」の背景にはオリエンタリズムおよびエキゾチシズムがある。これは、欧米人がバリ島を訪れた時に感じる自国での暮らしとの違いに由来している。オランダ植民地時代に訪れた欧米人観光者は、バリ観光の出発点となった。

インドネシアの独立が承認され、政治的な安定とともにインドネシア政府は外貨獲得のために積極的に観光開発を行った。1960 年代にホテルや国際空港がオープンし、1970 年代にヌサ・ドゥアリゾートの総合計画が作成され、1980 年代に入ってから、リゾートエリアで続々と高級ホテルが建設された。やがて、バリ島は国際的に有数の観光地として知られるようになった。

バリ観光の魅力は南国の一般的なものだけではなく、独特な伝統文化や癒しのためのスパ、ヨガ、バリ文化の体験が人気を博し、観光雑誌によくとりあげられている。バリ島の観光戦略として指摘されているのが、観光文化である。この観光文化には、セルフ・オリエンタリズムが強く反映されている。バリ観光では、伝統文化や自然風景のイメージを強調するために、バリらしさをアピールした。外国人観光者を誘致するために、このようなイメージ戦略は、メディアでも使用されている。

バリ島で登録された世界遺産、「バリ州の文化的景観：トリ・ヒタ・カラナ哲学に基づくスバック灌漑システム」にも、オリエンタリズムおよびエキゾチシズムがみてとれる。トリ・ヒタ・カラナの考えに基づく文化景観は、人同士の強い紐帯、神に対する感謝の心、自然の豊かな暮らし、物質的な豊かさより精神的な豊かさが世界的に評価され、世界遺産に登録された。観光者が感じるバリ島の魅力は、実際には観光文化とトリ・ヒタ・カラナを体現した文化が混在したものであるが、それらは日本の生活で得られるものではない。日本人女性たちは日本の生活では得られないものをバリ島で得られると感じ、バリ島に惹かれていくのである。

第 3 章では、聞き取り調査に基づき、バリ島在住 18 人の日本人女性のモノグラフをまとめた。彼女たちがバリ島を訪れた時期によって、三つの時期に区分して記述した。一つ目は、1970 年代、バリ島の観光開発が始まったばかりで、日本でも観光地として

はまだ知られていない時期である。この時期にバリ島を訪れ、その後バリ島に移住している女性1名をとりあげた。彼女は、現地の男性と結婚し、国籍を変更し、その後、夫とは離婚したが、バリ島に住み続け、旅行会社を経営している女性である。

二つ目の時期は、1980 年代から 1990 年代にかけてである。この時期は、バリ島の観光開発も進み、すっかり世界有数のリゾート地になっていた。特に 1990 年代に入ると、日本ではバリブームが到来した。この時期にバリ島を訪れた女性 14 人をとりあげた。このうち 10 名の女性が現地の男性と国際結婚している。そのなかの 4 名は国籍を変更し、6 名は国籍を維持している。就業形態は、既婚者、独身者とも、起業家や従業員であり、ほとんどは観光業に関連した職業に就いている。

三つ目の時期は、2000 年代に入ってからである。この時期にバリ島を訪れた女性 3 名をとりあげた。1 名はオーストラリア人男性と結婚（のち離婚）、2 名は独身である。彼女たちも起業家や従業員として働いており、職業は様々だが、彼女たちも観光業に関わる仕事をしている。

以上のような日本人女性について、バリ移住までの経緯と移住後の生活を中心にモノグラフとしてまとめた。世代間による差異があるとはいえ、二つの共通点を見出すことができる。一つ目は、脱物質志向である。二つ目は、彼女たちの多くはバリ島に移住後、観光産業の職業に就き、結果的にバリ島の観光開発に貢献している、という点である。なお、バリ島への移住プロセスと移住後の生活実態については、この第 3 章でまとめたモノグラフをもとに、第 4 章から第 6 章で分析した。

第 4 章では、日本人女性がバリ島に移住するプロセスを明らかにするために、インドネシア以外の国への海外渡航経験、バリ島を訪れた経緯、バリ島に移住したきっかけ、彼女たちが憧れたバリ島での暮らしについて検討した。

まず、彼女たちの海外渡航経験についてみると、1980 年代から 1990 年代にバリ島を訪れた女性たちの多くは、それ以前にバリ島以外の海外渡航経験をもち、主に英語圏の国々であった。彼女たちはホームステイプログラムを通して、英語を習得しながら、海外での生活を体験していた。また、バブル景気や円高により海外旅行が身近になり、彼女たちは積極的に海外旅行に出かけていた。しかし、彼女たちの海外旅行先は先進国であり、そこでの経験は日本とあまり変わらないものであった。

彼女たちがバリ島を訪れた経緯をみると、バリ島へ興味をもって訪問した女性の場合、インドネシア語、伝統芸術（ガムラン）、小説や旅行日記、ガイドブックの四つが興味

を抱くに至る情報源となっていた。一つ目のインドネシア語のケースでは、インドネシア語の勉強を通して、インドネシアの全般的な情報だけではなく、代表的な観光地であるバリ島についても情報を得ていた。二つ目のバリ伝統芸術（ガムラン）に惹かれたというケースでは、その伝統文化のある国へオーセンティシティを求めるために訪れるという事例であった。ちょうど 1980 年代はバリ島の観光開発の時期であり、バリ観光を宣伝するために、日本でもバリガムランが紹介され、知られるようになっていた。三つ目の小説や旅行日記のケースでは、小説のなかに描かれたバリ島の過ごし方や現地の文化にイメージを膨らませて、その舞台となったバリ島に関心を寄せ、訪れていた。その作品では、バリ島の独特の雰囲気を感じた小説家が、典型的な南国としてバリ島の魅力を表現していたのである。四つ目のガイドブックのケースでは、バリ島のガイドブックが重要な情報源として市販されるようになっていたことから、バリ観光が身近なものになっていた。そのほか、友人などに誘われ、バリ島に関心がなかったにもかかわらず、旅行に同行したというケースも少なくなかった。これは、彼女たちにとって海外旅行が身近になっており、行き先にかかわらず、旅行好きという理由から、友人からの誘いを気軽に受けたものであった。

2000 年代にバリ島を訪れた女性たちの場合は、観光のためではなく、観光業関係の仕事に就くためにバリ島を訪れていた。これは新たに登場したパターンといえる。2000 年代に入り、バリ島の観光開発が進展するなか、観光産業も盛んになり、観光の楽しみ方も多様化していた。そこで、観光産業ではさらにサービスを向上させるために、外国人労働者の需要が高まっていた。こうした状況のもと、彼女たちは観光産業の仕事に就くために、バリ島を訪れたのであった。

バリ島に移住するきっかけは、いずれの年代にバリ島を訪れたケースであっても、女性たちはバリ島を訪れた後、移民の動機を獲得していた。本研究の主たる対象者である、1980 年代から 1990 年代にバリ島を訪れた女性たちの移住までのプロセスをまとめると、つぎのようになる。初めてバリ島を訪れた時はパッケージツアーに参加し、リゾート地に泊まり、観光者向けの場所を訪れたが、物足りなさを感じる。そこで、今度は自由旅行を選び、民宿に泊まるようになる。一週間の滞在から始まり、それから滞在期間が長くなり、1 ヶ月以上も滞在するようになる。そして、最終的にバリ島へ移住する。

彼女たちが感じたバリ島の魅力は、Benson and O'Reilly (2009a)が指摘したライフスタイル移民の移住先に合わせ、三つに大別することができる。一つ目は、観光地型であ

り、ビーチリゾート、陽射しの良い地域という魅力である。二つ目は、田舎暮らし志向型であり、バリ滞在中に感じた自然の豊かさ、南国らしいの暖かい気候、素朴でゆとりのある暮らしという魅力である。三つ目は、ブルジョア・ボヘミアンであり、バリ島の伝統技術および文化や宗教的儀礼に対する魅力である。このように、彼女たちが感じたバリ島の魅力は、日本では得られないものであった。最初にバリ島を訪れた時は、興味をもっていなかったが、滞在中にスローライフ、バリ舞踊、宗教儀礼の魅力に惹かれ、やがてリピーターになり、バリ舞踊の鑑賞や稽古、宗教儀礼の神秘性に夢中になる。そして、リピーターを経て、バリ島に移住するのである。

移住の要因としては、スローライフ、解放感、心のゆとり、バリ舞踊、バリガムラン、熱帯地方の自然、宗教儀礼があげられる。このような生活の質の向上や脱物質的な生活経験が、ライフスタイル移民の移住の要因となっている。こうして彼女たちは、実際にバリ島を訪れた後、移住の動機を獲得するのである。その移住の手段として、現地の男性との結婚および現地での就職である。そこで、バリ島での国際結婚および就労について、第 5 章と第 6 章でそれぞれ詳しく分析した。

第 5 章では、バリ島における日本人女性の国際結婚、国籍の変更または維持、独身でバリ島に移住する日本人女性の在留資格について検討した。従来、日本人女性の国際結婚はハイパガミー志向結婚であり、結婚は経済・社会的上昇を目指す手段とみなされてきた。しかし、バリ島における日本人女性の国際結婚はハイパガミー志向結婚ではない。筆者はこれを「脱ハイバガイミー志向結婚」と名付けた。脱ハイパガミー志向結婚の背景には、第 1 章で指摘したように、先進国における女性の社会進出と、経済的自立の達成がある。加えて、彼女たちが、経済・社会的上昇よりも生活の質の向上、スローライフを志向しているからである。彼女たちがライフスタイル移民であることは、自身の配偶者選択にも大きく影響している。彼女たちは日本の生活に不満を抱き、そこから逃れ、脱物質的な生活、スローライフを求めてバリ島に移住している。結婚もその生活の一部である。

しかし、結婚後、彼女たちは国籍や在留資格の問題に直面している。国籍についてみると、1990 年代に国際結婚した日本人女性は国籍を変更していた。国籍の変更は、制度的理由と血縁関係・地縁関係によるものである。インドネシア国籍となることで、煩雑な手続きから解放され、就業制限からも自由になるのである。さらに、国籍を変更することで、バリ島で新たに築いた関係、血縁関係および地縁関係、そしてインドネシア

に対する帰属性が強まっている。彼女たちは日本国籍にこだわっておらず、国籍の変更は彼女たちにとって移住するための戦略である。国籍選択に関しても、ライフスタイル移民は既存の価値観にこだわらず、自身の価値観に基づいて行動している。

しかし、1990 年後半から、結婚後も国籍を維持する日本人女性が増えている。彼女たちはバリ島で外国籍のままで暮らすため、定期的に在留資格の更新が必要で、時間的にも金銭的にも負担がかかる。また、現地の男性と結婚しても、彼女たちの在留資格の手続きは変わらず、バリ島で働くためには就労ビザが必要となる。しかし、彼女たちは日本国籍の利便性を手放したくないと考えている。日本国籍を維持することで、帰国を含め、他国への移動が容易であり、また将来の自分や家族の生活に備えることができるのである。ライフスタイル移民である彼女たちは、将来のライフスタイルも視野に、結婚後の国籍についても既存のあり方にとらわれず、自分自身で選択しているのである。

一方、独身でバリ島に移住している女性たちには、在留資格の問題があった。彼女たちはバリ島で働いているため、就労ビザという在留資格である。従業員として働いている場合は、在留資格に関するすべての手続きや費用を企業主が負担するが、彼女たちは契約社員である場合が多く、将来の見通しは不安定である。

第 6 章では、バリ島に移住する日本人女性がどのような職業生活をしているのか、理想とするライフスタイルとの関係から検討した。雇用形態別にみると、日本人オーナーの下で雇われている女性たちは、主に観光産業のなかで、管理職と同等のポジションを得て、忙しく働いていたが、仕事が忙しいといっても、日本ほど忙しいわけではない。もちろん、管理職に就くことで様々な苦労も経験し、働く環境や文化の違いから疲弊してもいるが、プライベートな時間も楽しめており、仕事の疲労も解消されている。彼女たちにとってバリ島での仕事は「楽しい」「やりがいがある」ものとなっている。

また、起業家として働く彼女たちも、観光に関わる様々な仕事をしていた。バリ島における観光開発の進展、観光の多様化によって自身のビジネスの着想を得ている。彼女たちのバリ島での起業が成功したのは代行サービスや、信頼できる日本人がいることも重要であった。また、彼女たちはバリ島で経済的に成功するよりも、バリ島で手に入ったライフスタイルを維持することを重視している。これは起業家になったライフスタイル移民の特徴でもある。

起業家である彼女たちの仕事は、現地の人々の雇用機会を増やしているだけでなく、バリ島の人々は、日本人のサービスの仕方を学び、クオリティの高いサービスを提供で

きるようになっている。同時に、彼女たちにとっても、バリ島の人々と仕事することは、現地の考え方や文化に対する理解を深める機会となっている。このようにして、現地の人と移住者たる彼女たちとの間の相互理解が進んでいる。

以上、バリ島に在住する日本人女性に対する聞き取り調査によって、ライフスタイル移民の移住プロセスと生活実態を分析した。終章にその成果と意義について、つぎの3点があげられる。

第一に、ライフスタイル移民が移住に至るまでの過程を明らかにしたことである。まず、彼女たちは観光旅行の目的でバリ島を訪れ、その後リピーターになり、繰り返しバリ島を訪れるうちにバリ島への移住の動機を獲得する。そして、彼女たちは現地の男性と結婚、あるいは仕事を得ることで、自身が志向するライフスタイルの実現を確かなものにする。

このような過程のなかで、最初のポイントは、彼女たちが最初にバリ島を訪れた時にバリ島の魅力に惹かれる、ということである。その背景には、バリ島の観光開発におけるセルフ・オリエンタリズムがある。第2章の通り、バリ島の観光開発ではセルフ・オリエンタリズムが活用されて、あらゆる場面でバリらしさを活かしたバリ観光の魅力がアピールされている。このようにバリ島を訪れた日本人女性は日本では得られないことをバリ島で体験する。具体的には、ゆとりのあるくらし、居心地、解放感、バリ伝統芸術や宗教儀礼である。これらを通して、彼女たちは脱物質的な生活に魅了を感じる。このような体験が移住に至る過程の第一歩となるが、それが可能となっているのは、第1章の通り、すでに自由旅行が観光の主流となり、彼女たちも、これらの非日常的な経験を容易に行うことができたからである。

バリ島に魅了に惹かれた彼女たちは、一度訪れただけでは不十分と感じ、その後、バリ島のリピーターとなる。これを可能になった背景は、日本の雇用制度の多様化、女性のノンキャリア志向、航空運賃の低廉化、旅の仕方の変化があげられる。

日本における雇用制度の多様化により、非正規雇用の働き方が増え、彼女たちは自分の都合を優先しながら稼ぐために働き方を変える。また、正規職の場合も含めて、彼女たちはノンキャリアとして働き、時間的にも金銭的にも海外旅行が可能である。そのようなフレキシブルな働き方やノンキャリア志向により、彼女たちはバリ島と日本を行き来することができるのである。また、彼女たちは両国の経済格差も大いに利用している。つまり、彼女たちの日本での稼ぎは、バリ島での消費を満たすのに十分な価値があると

考えられる。

その他に、航空運賃の低廉化、旅の仕方の変化という点も見逃せない。旅先での過ごし方として、リゾート地より格安宿舎に泊まり、現地の人々とほぼ同じ暮らし方で過ごすというあり方に変わった。よって、滞在費が安く抑えられ、長期滞在も可能となる。このような旅の仕方を好む外国人旅行者は、他国の文化に関心をもち、積極的に現地の人々とも交流するタイプである。一方、現地の人々もこれらの外国人旅行者に対してオープンに接することが多い。彼女たちもこのような形の滞在により、現地の文化に触れながら自分なりの時間を楽しく過ごす。

日本人女性たちはリピーター、長期滞在を経て、やがて移住に至った。彼女たちは、リピーターの時、日本で稼いでバリ島で消費するというパターンだった。そのうちに日本での働き方に疲弊を感じ、そこから「逃れ」たいという気持ちが強まるのである。そして、日本で稼いでバリ島で消費するよりも、バリ島で稼いでバリ島で消費する、というあり方を考えるように至った。

彼女たちがバリ島で稼ぐことができるのは、バリ島で観光産業が盛んであり、日本人女性に対して、労働者としての需要があるからである。このように、バリ島に移住した日本人女性のライフスタイル移民は、観光と深く結びついている。バリ島の観光が、彼女たちをバリ島に誘い、彼女たちを魅了し、さらに彼女たちのバリ島への移住を支えているのである。

このような背景のもと、彼女たちは自分に合うライフスタイルを求めて、バリ島に移住している。ライフスタイル移民である彼女たちは、自国で感じた不満から「逃れる」、解放感を求めてバリ島で暮らして、自分らしい生活を実現するのである。

本研究では上記のようなライフスタイル移民の移住プロセスを、バリ島在住の日本人女性への聞き取り調査を通して、実証的に明らかにした。序章で述べた通り、日本人女性のライフスタイル移民について、その詳しい実態を捉えた先行研究が存在しない現在、本研究はその先駆的研究として位置づけられる。このことが本研究の最大の意義である。

第二に、ライフスタイル移民の日本人女性の国際結婚が、「脱ハイパガミー志向結婚」であることを明らかにしたことである。これまで、日本人女性の国際結婚はハイパガミー志向結婚、すなわち、経済・社会的上昇を目指す結婚であるとみなされてきた。しかし、第 5 章で明らかにした通り、バリ島における日本人女性の国際結婚はハイパガミー志向結婚ではない。彼女たちは、従来の結婚観にとらわれていないのである。よって、

筆者はこれを「脱ハイバガイミー志向結婚」と名付けた。

このように彼女たちが従来のハイバガミー志向から脱しているのは、生活の質の向上、スローライフを志向するライフスタイル移民であるからである。彼女たちは、社会・経済的上昇や物質的な生活ではなく、生活の質の向上、脱物質的な生活を重視し、その実現を優先するライフスタイル移民である。よって、彼女たちは既存の価値観に振り回されることなく、確固たる自分の価値観で、自分なりのライフスタイルを選択している。それは、結婚についても揺らぐことはない。そこには、自由で主体的な女性の生き方をみることができる。

このように、本研究では日本人女性のライフスタイル移民の分析を通して、社会・経済的上昇を求めない「脱ハイバガミー志向結婚」を見出した。このような結婚の存在は、国際結婚に関する先行研究では論じられることのなかったものである。新しい国際結婚の型を析出し、「脱ハイパガミー志向結婚」として提示したことは、本研究の意義といえる。

第三に、ライフスタイル移民の日本人女性のなかで、国際結婚後も日本国籍を維持する傾向にある、ということを明らかにしたことである。第5章の通り、移住後に現地の男性と結婚した女性の場合、従来は結婚後、インドネシア国籍に変更するのが一般的であったが、近年、結婚後も日本国籍を維持する女性が増えてきている。

ライフスタイル移民にとって国籍は、自分が望むライフスタイルを実現するための手段である。国籍を変更した女性も、国籍を維持している女性も、国籍をライフスタイル実現の手段とみなしている点は共通している。しかし、自分にとって望ましいライフスタイルというものを捉える射程が異なり、それが国籍選択の違いとなっている。

国籍を変更した女性は、自分が求めるライフスタイルは、バリ島での生活であり、それを維持するために国籍を変更している。このことは、彼女たちにとって、バリ島での生活が「生涯にわたる唯一の」望ましいライフスタイルであることを示している。一方、国籍を維持する女性たちは、日本への帰国を含め、他国への移動が容易であり、また医療や介護の面で、将来の自分や家族の生活に備えることができる、という点を考慮する。つまり、彼女たちは、バリ島での生活が「生涯にわたる唯一の」望ましいライフスタイルとは考えていないということである。彼女たちは、現在はバリ島でのライフスタイルを志向し、バリ島に移住しているが、ライフステージに応じて自分にとって望ましいライフスタイルは変化しうる、と捉えているのではないだろうか。彼女たちにとって、日

本国籍は、新たに求めることになるライフスタイルを実現するための手段となるのである。そこには、生涯にわたり、常に自分にとって望ましいライフスタイルを求めて、移住先を選択し、戦略的にそれを実現しようとする、ライフスタイル移民の主体的、積極的な生き方がみてとれる。

本研究では、結婚後も国籍を維持する女性を通して、国籍がライフスタイル実現のための手段として、より長期的、戦略的な観点から選択されていることを見出した。このことは、国際結婚における国籍選択に新たな視点を提示したことになる。また、志向するライフスタイルの変化に応じて、移住先を主体的に選択し続けるという点は、ライフスタイル移民の先行研究において見落とされていた点であり、本研究が提示した新たな視点である。